

日本高等教育開発協会（沖 裕貴会長）は、九月十八日、十九日、新潟医療福祉大学で、第四回高等教育開発フォーラムを開催、海外からのゲストによる基調講演のほか、双方向でのグループワークを多数行うプログラムに全国のFD担当者が多く参加した。

本紙企画「教授法が大学を変える」に協力をしている同協会の第四回となるフォーラムでは、まず、山本正治新潟医療福祉大学学長、沖会長のあいさつで始まり、「今後の日本の大学教育を考える―国際的視点から」と題した、カリフォルニア州立大学フラトン校のヴィクトリア・コスタ氏が基調講演した。

コスタ氏は、デジタルネイティブで、グローバルに繋がる学習者（学生）が変容している中で、二十一世紀の大学も見直していくべきであり、二十一世紀に必要な「知識」とは、マッシュアップ、つまり質の異なる要素の融合によって生まれるとした。

また、二十一世紀に必要なスキルは、①クリティカルシンキング、②コラボレーション、③コミュニケーション、④クリエイティビティであると解説。これらのスキルを

学生に身につけさせるために、

教員自身もルーブリックやスコアリングガイド等を駆使しながら変わらなければならないとし、MOOC等のICT技術が進展しようとも、学生にとって教員は世界観を変える存在であることは変わらないと述べた。講演中は、様々な問いについて、参加者同士で議論するセッションがたび

たび設けられ、この基調講演自体がアクティブラーニングとなっていた。

十九日には、グループワークやディスカッションを中心とした次の四つのセッションが開催され、参加者は思い思いのテーマに参加し、熱心に議論した。その後、会場を変えての懇親会が催され、参加者はFDの話等に花を咲かせた。

①「アクティブ・ラーニングの再考」新潟大学准教授加藤かおり氏

②「職員の専門性開発」大阪大学准教授佐藤浩章

氏

③「シラバスとルーブリックの開発」上越教育大学講師の城間祥子氏

④「学生を巻き込んだFD」立命館大学教授沖裕貴氏

最後に、一堂に会してのリフレクション（振り返り）では、各セッションの状況が報告され全日程を終了した。